

Colabo10周年記念誌

活動する人・支える人
特集2021

10th Anniversary

Colabo





目次

■はじめに—Colabo10年の歩み	1
■活動年表	5
■10年間の活動実績／受賞歴	6
■Colaboの活動から見えること—スタッフの想い	7
■なぜ活動に参加するのか—ボランティアの声	29
■私がColaboを応援する理由—応援者メッセージ	36
■メディアから見るColabo	39
朝日新聞編集委員 大久保真紀さん	
専修大学教員・元共同通信記者 澤康臣さん	
NHKチーフディレクター 浅田環さん	
■理事によるショート対談	48
川村百合弁護士と考える 児童福祉とColabo、子どもの権利保障	
奥田知志さんと考えるColaboのこれから	
■理事・監事メッセージ	55

はじめに

Colabo10年の歩み



一般社団法人Colabo代表理事
仁藤夢乃

中高時代の自身の経験から

2011年5月に立ち上げたColaboの活動が、今年10周年を迎えました。

Colaboの活動は、私自身の中高時代の経験から、家が安心して過ごせないとき、頼れる大人のいないなか、街やネットをさまよう少女たちが性売買の斡旋業者や買春者からしか声をかけられず、性搾取の被害に遭う現状を何とかしたいと思ったことから始まりました。15歳、16歳だった2005年ごろ、私は家に帰りたくなく、渋谷の街を月25日さまよう生活を送っていました。高校を2年生の夏に中退後は新宿歌舞伎町で過ごすようになりました。街には同じように、居場所や頼れる大人のいない少女たちがいて、ビルの屋上に段ボールを敷いて一夜を明かすことも度々ありました。そんな私たちに声をかけて来るのは、買春者か、性搾取の斡旋業者しかいませんでした。私たちの周りでは、性暴力被害や望まない妊娠が毎日のように起きていました。

フィリピンで目にした日本人買春者

その後、私は良い出会いがあって前を向いていける

ようになりましたが、18歳ではじめて訪れたフィリピンのマニラで、同世代の少女たちが日本人向けに売られているのを目にしたことも、Colaboの活動を始め大きなきっかけとなりました。彼女たちは日本人買春者を相手にするために日本語を勉強し、日本人らしい源氏名を付けられて売られていました。話をすると、本当は学校に行き教員になりたかったけれど、お金がなく、地元では仕事がなく、繁華街に出て来て実家に仕送りしていると聞きました。そして、その店に日本人男性たちが彼女たちを買いに来ているのを見たとき、私は「この人たち、知っている」と思いました。渋谷や新宿の街で、毎日「いくら?」「ホテルにいかない?」「お腹空いてない?食事だけでもどう?」「お金欲しいんでしょ?」などと声をかけて来ていた男たちと、同じ目をした男性たちでした。彼らは堂々と女性たちを買っていました。自分たちが「買ってあげているのだ」とでも言うように。私は、日本人男性たちが「こんなところにまで少女たちを買いに来ているのか!」と衝撃を受けました。

そのとき、私は、これまで自分の周りで起きていたことは、自分だけの問題ではないのかもしれないと思いました。それまでそうした男性たちに声をかけられても、自分が悪いから、自分が家に帰らないから、自分が親の期待に沿えないし、できることが他にないから、自分には性的な価値しかないのだと考えていましたが、もっと大きな問題なのではないかと。そして、こんなに頑張っている少女たちに、どうして他の選択肢がないのかと思いました。この現状を変えたい。でも、どうしたらいいかわからない。それが、大学進学への動機になり、明治学院大学の社会学部にAO入試で進学しました。

日本で起きていることは、自己責任?

私が進学できたのは、義務教育を受けることができる環境で育ったことや、支えてくれる大人に出会えたこと、親族からの金銭的な援助があったことや、無利子の奨学金を借りることができたからです。当時の友

人たちや、今Colaboで出会う少女たちの多くは、中卒か高校中退で、小中学校もろくに通えず、暗算が苦手な人も少なくありません。私も16歳くらいの頃は、自分の体験や考えを言葉にすることも、文章を書くこともできませんでした。何を書いたらいいのか以前に、自分の気持ちもわかりませんでした。

そんななか大学に進学した私は、はじめ「すごいところ、雲の上に来てしまった」という気持ちでいましたが、他の学生たちと関わるなかで、世の中のほとんどの人が、国内の虐待や性搾取の現状を知らないことを知りました。たとえば、フィリピンの子どもたちの性搾取については「助けなきゃ」と言っている人たちも、日本にもストリートチルドレンのように路上やネットカフェで生活している子どもたちがいて、買春被害に遭っていることを伝えると「物語の中の話みたい」「日本は努力さえすれば誰でも大学に進学できる国」「自己責任でしょ」と言われることが多くありました。そうした反応に絶望感を深めつつも、現状を知っているものとして、私がやるしかない、活動をはじめました。

東北での出会いから、都会だけの問題ではないと知る

今では知る人が少ないかもしれませんが、Colaboは2011年、東日本大震災直後に当時学生だった私がボランティアで入った宮城県石巻市・女川町の避難所をまわるなかで、地元の中高生たちと出会ったことから、地域のために「なにかしたい」という彼女たちの気持ちを一緒に形にしたいと立ち上げたのがはじまりです。東京で育った私はそれまで、自分が経験したことは「都会ならでは」なのかなと思っていましたが、このときの出会いから、同じような想いや経験をしているけれど、声をあげることも、繁華街に逃げることもできずにいる中高生が地方にもいることを知りました。

避難所から仮設住宅に入れることが決まった女子高生が「家ではお父さんが暴力をふるうから、ずっと避難所にいたい。そのほうが他の人の目があるから」と言っていたり、性被害にあったことを地元では誰にも相談できずにいることを打ち明けてくれた人もいました。母親が亡くなったあと知り合いの家で育ち、その後、保護された里親のもとでも虐待を受け、犯罪に巻き込まれ、そこから逃れるために頼った先が性搾取

の業者だった高校生との関わりもあり、地方でも、孤立した青少年が一瞬で搾取や暴力に取り込まれていく現状を目の当たりにしました。

性搾取の実態を伝え、変えるため、女の子たちと共に歩んできた10年

2013年に自身の経験をまとめた『難民高校生』を出版し、大学卒業に合わせてColaboを法人化しました。街をさまよう少女たちと出会い、つながるため、声掛けによるアウトリーチ活動をはじめ、自分自身も中高生の時に一番困った『飯と宿』を必要とする子たちに自宅を開放していました。当時は「JKビジネス」という言葉もありませんでしたが、そこで被害に遭っている少女たちとの出会いが多くなり、2014年に『女子高生の裏社会』を出版し、実態を告発しました。

2015年には「東京都青少年問題協議会」委員に就任し、米国国務省の人身取引報告書に調査協力したことから、日本の児童買春やJKビジネスの実態を伝え、国際社会から問題が注目されるようになりました。外国人記者クラブでも日本における児童性搾取の実態を告発したことから、Colaboに対する性売買斡旋業者や買春者などからの攻撃、デマの流布等が強まり、今でも続いています。

女の子たちが、夜でも、いつでも駆け込めて泊まれる場所をつくりたいと、2015年5月にクラウドファンディングで集めたお金をもとに、一時シェルターを開設しました。7月には、愛知県で日本初のJKビジネス規制条例制定ができましたが、「18歳未満は雇ってはいけない」という内容で、搾取の構造は変わらないまま事実上の合法化となってしまいました。9月にはNHK・ハートネットTVやクローズアップ現代で活動が特集され、10月には国連の児童買春・児童ポルノ・人身取引に関する特別報告者と面会・調査協力しました。その頃、女の子たち自身が活動するサポートグループである『Tsubomi』が、「私たちは『買われた』展」の企画を立ち上げ、準備がはじまりました。

2016年3月には、10代のメンバーと共にタイに研修へ行き、日本人向けの買春カフェで少女たちが売られる現状や、100人以上の日本人買春者が来ている状況を確認し、ストリートチルドレンの青年たちと交流しました。4月には、泊まるどころだけでなく、暮らせる

場所が必要だと、中長期シェルターをシェアハウスとして3部屋開設しました。8月には「私たちは『買われた』展」を初開催し、11日間で約3千人が来場し、大きな反響を呼び、NHK・ETV特集でも報道されました。

2017年7月には、愛知県から2年も遅れて東京都でJKビジネス規制条例ができました。9月に中長期シェルターを増設し、2軒6部屋になりました。韓国視察を通して、「慰安婦」にされた女性たちとの出会いに励まされ、バスを使った動くユースセンター、アウトリーチの活動を知ったことから「日本でもバスをやりたい!」と想いを強くし、具体化に向けて準備を始めました。

日本政府も支援の必要性を認め、海外との連帯も力に

2018年7月「厚労省困難な問題を抱える女性への支援のあり方に関する検討会」構成員に就任し、現在の女性支援の根拠法になっている売春防止法が差別的で問題の多いものであることを指摘し、これからの包括的な女性支援のあり方について提言しました。10月には、Colaboの活動が厚労省・東京都の「若年被害女性等支援モデル事業」に選定され、10代女性無料のバスカフェ『TsubomiCafe』を開始しました。11月には、ソウルにて韓国の10代女性人権センターと共催で、日韓に同じような性搾取の状況があることを伝える「私たちは『買われた』展」の合同企画展『オヌル（今日）展〜Here I am, Here We are.』を開催しました。

2019年1月には、一時シェルターを増設し、2物件に。7月、中長期シェルターを増設し、3軒9部屋となりました。Colaboのような活動を全国各地に広げることにも力を入れ始め、全国の支援者向けの韓国研修を開催。11月には、アジアで初めて開催された世界シェルター会議in台湾で「私たちは『買われた』展」と講演を行いました。12月には、韓国から活動家と当事者の少女たちを招待し、当事者主体の支援のあり方に関する日韓シンポジウムを開催。Colaboで活動する10代のメンバー4名もスピーチを行いました。

2020年3月、10代のメンバーと共に、実体験に基づき性搾取の実態を告発するYoutube番組「シリーズ キモいおじさん」を開始し、大きな反響を呼んでいます。新型コロナウィルスによる外出自粛要請や学校休校により相談が2.5倍に急増したことから、4月からホテル

との緊急宿泊支援連携を開始しました。その頃、バスカフェに視察に来た国会議員団による10代のメンバーに対するセクハラが起き、抗議文を10代のメンバーと作成、公開し、「シリーズ キモいおじさん」でも、相手方からの謝罪文の問題点を徹底解説しました。6月と11月には中長期シェルターを増設し、5軒15部屋になりました。

2021年4月には、厚労省・東京都の「若年被害女性等支援事業」が本事業化。5月には、新宿歌舞伎町に活動拠点を新設。また、少女たちのおかれた現状を改善し、政策提言を行うための調査研究チーム立ち上げました。9月には、脱性売買相談所の運営に向けた準備を始めています。

支援団体ではなく、当事者運動として

これまで、Colaboでは、『すべての少女が「衣食住」と「関係性」を持ち、困難を抱える少女が暴力を受けたり、搾取に行きつかなくてよい社会』を目指して活動してきました。

Colaboは今、多くの方に「支援団体」と思われていると思いますが、私たちの活動は「当事者運動」であると考えています。当事者たちが、自らの経験から必要だと思うことを自分たちで、当事者以外の人たちも巻き込みながら形にしてきたのがColaboです。家に帰れず、性搾取の中で生き抜いてきた当事者たちが、当事者として必要だと思うことを形にしてきたので、その手前の状況にある女の子たちにとっても選ばれる「支援」になったのだと考えています。

私たちは、出会う女の子たちと「支援する／される」関係ではなく、「共に考え、行動する」ことを大切にしてきました。そして、一人ひとりが社会を変える主体だと考えています。

現在の日本社会では、女性に対する暴力や性暴力が深刻な状況にあります。なかでも、女性の性の商品化や性搾取は深刻ですが、性暴力被害者ですら声をあげられない社会で、性売買・性搾取の被害者は、より声を封じられています。女性に対する暴力や性暴力の根絶、被害者救済に向けた活動は広まりを見せつつありますが、性搾取被害の根絶、被害者の尊厳や権利回復のための活動はないに等しい状況です。

韓国では、2000年と2002年に性売買女性たちが

業者に閉じ込められていたビルで火災が起き、女性たちが亡くなったことから、これ以上このようなことを繰り返したくないと女性運動が起こり、2004年に性売買防止法が制定されました。日本でも、2001年に歌舞伎町のビル火災で性売買女性が亡くなりましたが、韓国のような運動は起きませんでした。それは、女性が抑圧され、性売買が当然のものとして容認され続けてきた日本社会の姿だと考えています。

Colaboでは、この10年間、10代の少女たちと共に声をあげ、JKビジネスの実態の告発や、若年女性支援や法整備の必要性を訴え、市民の認識や制度を変える力となってきました。自己責任論と社会の無理解によって「助けて」と言えない状況にある少女に出会うためのアウトリーチや、シェルターの運営、性搾取被害や福祉の機能不全の実態を伝える活動などを、10代を中心とする当事者とともに行ってきました。

今、そうした少女たちと同じような状況にありながら、支援がなく10年、15年と性搾取・性売買の現場から抜け出すことができずに生きてきた性売買経験女性たちが、Colaboの活動に賛同し、繋がりはじめています。

これからのColabo—性売買経験当事者と共に

コロナ禍で女性の貧困や自殺がこれまでにないほど深刻になっていますが、芸能人がラジオでやむを得ない事情で女性が性風俗で働くことを待ち望むような発言をするなど、性搾取を容認し、女性を性的に消費し、暴力にさらすことを楽しみにするような発言が堂々と言ってしまう社会を変えることは緊急の課題です。

これからのColaboは、10年の時を経て繋がりはじめた性売買経験女性たちと共に、10代の頃にColaboのような活動に出会えないまま今も性売買の現場にいる女性たちを支える取り組みについて考えていきたいと思っています。

私たちが10年間活動を継続し、女の子たちの生活を支え、社会を変える力となることができたのは、市民の方の理解や協力、たくさんの具体的なご支援があったからです。特に、2018年から行政の委託事業を受けることになってから、行政からの圧力に屈せず、言うべきことは言い続けるために、市民の方からのご寄付をベースに活動することの大切さを強く実感しまし

た。改めて、ここに感謝をお伝えします。これからも想いを共有し、具体的なご支援や行動をもって、現状を変えるために多くの方が活動を共にしてくださることを願い、信じています。

自分はどんな大人でありたいか？考えるきっかけに

本冊子は、Colaboの活動10周年を記念して作成しました。スタッフや、ボランティアさん、応援者の方や、メディア関係者、理事たちと活動を振り返っています。Colaboでは、女の子たちと共にあること、女の子たちが中心であることを大切にしてきたため、スタッフに注目した発信ははじめてです。10周年記念にあたり、まずColaboとつながる9人の女の子たちに話を聞きました。彼女たちのインタビューは示唆に富んでいたもので、より多くの人に届けたいと書籍化に向けて準備を進めています。そのため、本冊子にはスタッフや関係者のインタビューのみを収録することになりました。

女の子たちのインタビューでは、「あなたにとってColaboはどんなところ？」と聞いていて、「息抜きする場所」「生きていくためのチーム」「休憩所」「成長できる場所」「安心するところ」「家族みたい」「世の中を知れたところ」「第二の家」「失敗してもいい場所」などと話してくれました。

彼女たちの語りから、Colaboが他の大人と違うところとして「仕事感がない」「嫌な大人がいない」などの言葉が多く聞かれました。これからColaboのような活動をどのように広げていくか、大人たちがどう変わるべきなのかを考えると、彼女たちの話は大きなヒントになると感じています。

スタッフインタビューは、女の子たちのいう「仕事」としてやっている大人と何が違うのだろうかと考えながら聞きました。スタッフの似顔絵は、シェアハウスで暮らしながら、声掛けチームとしてバスカフェでのアウトリーチを担っているメンバーが描いてくれました。スタッフ一人ひとりの雰囲気がにじみ出ています。

Colaboにはどんな大人たちが集まっているのか、この冊子を通して知っていただき、自分はどんな大人でありたいか？考えるきっかけとしていただけたら嬉しいです。

活動年表 | Colabo10年の歩み

◆ Colaboの活動

◆ 当事者の活動

◆ 社会の動き



2011年 5月

東日本大震災後、Colaboを立ち上げ

9月

◆女川高校・大沼製菓とコラボした支援金付き菓子「たまげ大福だっちゃ」完成

2013年 3月

団体を法人化。『難民高校生』(英治出版)出版

4月

10代の少女たちが立ち寄れる「Colaboスペース」を渋谷に開設(～10月)

10月

◆夜間巡回(アウトリーチ)事業、相談事業開始

11月

◆仁藤の自宅を解放し、食事提供支援、宿泊支援開始

「難民高校生を贈ろうプロジェクト」開始

JKビジネスの実態調査開始

2014年 3月

『難民高校生』台湾で翻訳出版

4月

◆女の子たちによるサポートグループ活動開始

◆夜の街歩きスタディーツアー開始

8月

『女子高生の裏社会』(光文社新書)出版

2015年 1月

◆「東京都青少年問題協議会」委員に仁藤が就任

◆米国国務省人身取引報告書に初めて調査協力

◆日本の児童買春やJKビジネスの実態を伝え、国際社会から問題が注目される

2015年 5月

◆一時シェルター開設

◆外国人記者クラブにて「JKビジネス」の実態を記者会見で告発

7月

◆愛知県で日本初のJKビジネス規制条例制定

9月

ハートネットTV「ブレイクスルー」、クローズアップ現代で特集

10月

◆児童買春・児童ポルノ・人身取引に関する国連特別報告者と面会・調査協力

◆サポートグループが『Tsubomi』として活動開始・アクセサリーづくり開始

◆「私たちは『買われた』展」企画立ち上げ・準備開始

2016年 3月

10代のメンバーと共にタイ研修へ
元ストリートチルドレンの青年たちと交流

2016年 4月

◆中長期シェルター(シェアハウス)開設

8月

◆企画展「私たちは『買われた』展」初開催(11日間で約3千人来場)

10月

ETV特集「私たちは買われたー少女たちの企画展」放送

少年院での講話活動開始

2017年 7月

◆東京都でJKビジネス規制条例制定

9月

◆中長期シェルター(シェアハウス)を増設し、計2軒6部屋に
韓国視察「日本でもバスをやりたい!」



2018年 7月

◆「厚労省困難な問題を抱える女性への支援のあり方に関する検討会」構成員に仁藤が就任

10月

◆バスカフェ『TsubomiCafe』開始

厚労省・東京都「若年被害女性等支援モデル事業」に選定

11月

ソウルにて「私たちは『買われた』展」日韓展開催

2019年 1月

◆一時シェルター増設、2物件に

2019年 7月

◆中長期シェルター（シェアハウス）を増設し、3軒9部屋に
支援者向け韓国研修開催

11月

◆「世界シェルター会議」（台湾）で企画展示、講演

12月

◆「当事者主体の支援のあり方に関する日韓シンポジウム」開催

2020年 3月

新型コロナウイルスによる外出自粛要請により相談が2.5倍に急増

◆性搾取の実態を告発するYoutube番組
「シリーズ キモいおじさん」開始

4月

◆ホテルとの緊急宿泊支援連携開始

◆バスカフェへの国会議員視察団によるセクハラ等への抗議文公開

6月

◆中長期シェルター（シェアハウス）を増設し、4軒12部屋に

11月

◆中長期シェルター（シェアハウス）を増設し、5軒15部屋に

2021年 4月

◆厚労省・東京都『若年被害女性等支援事業』が本事業化

5月

◆新宿歌舞伎町に、活動拠点を新設・調査研究チーム立ち上げ

9月

脱性売買取談所運営準備開始

10年間の活動実績

2011年5月～
2021年3月

■相談事業

・相談者数	3,279名
・面談	4,970回
・同行支援	701回
・他機関連携	1,176件

■夜間巡回

・アウトリーチ回数	228回
・バスカフェ開催数	83回
・声掛け人数	7,906名
・バスカフェ利用者数	1,624名

■食事・物品提供

・食事提供	5,075食
・物品提供	3,762回
・『難民高校生』	1,183冊

■一時保護・宿泊支援

・一時シェルター日中利用	182名、2,408件
・宿泊支援	229名、2,049泊

■生活支援（中長期シェルター）

・シェアハウス入居者	48名
・生活支援	406件
・就労支援	316件

■サポートグループTsubomi

179名参加、557回活動

・「私たちは『買われた』展」

22会場、84日間、11,626名来場

■啓発事業

・講演会	328回、41,385名参加
・夜の街歩きスタディーツアー	174回、1,412名参加

受賞歴

2015年

- ・エイボン・プロダクツ
「エイボン女性年度賞」
- ・日経ビジネス「次代を創る100人」
- ・文藝春秋「日本を代表する女性120人」
- ・日経ウーマン・オブ・ザ・イヤー
「若手リーダー部門」

2019年

- ・「Forbes Under30 Asia
2019社会起業家部門」

2021年

- ・HAPPY WOMAN実行委員会
「国際女性デー HAPPY WOMAN
AWARD for SDGs」
- ・公益財団法人社会貢献支援財団
「社会貢献者表彰」
- など

Colaboの活動から見えること

スタッフの想い



わかちゃん

女の子と直接やりとりする相談支援、
シェアハウスに暮らしている子の生活支援、
アウトリーチの担当をしています。

—Colaboで活動するきっかけは？

私はプレーパークという屋外の遊び場で9年ほど働いていました。そこに来ていた中高生たちとかかわる中で、居場所がなかったり、公園にいただけで警察を呼ばれちゃったり、周りの大人は誰も話を聞いてくれないと思っている子が多くて、中高生が生きにくい社会だと感じていました。中高生世代の居場所が必要だなとか、彼らが主体的に活動できる場があったらいいなと思って活動していく中で、家に帰れない子たちとの出会いもあって、個人的に家に泊めたりすることもありましたが、もうちょっと公的に夜にいられる場所が必要なんじゃないかなと思っていた頃に、ゆめのちゃんの講演会があって、静岡まで行きました。講演会もすごく勉強になったんですが、その後に本の販売とサイン会があって、そのときにぼろって「こういう男の子がいるんだけど」と危険な生活をしている子のことを話したときに、ゆめのちゃんに「そういう世界に引きずり込まれるのは一瞬だよ」って言われて。一、二分の会話だったけど「そっ

か。悩んでる場合じゃない」と思って、その日の夜に戻ってから、すぐにその子と話しをして、その子は関わっていた裏スロットの仕事をやめて、その後も色々大変なことはありましたが、今は、子どもが産まれて、頑張っています。

それまで、どうにかしたいと思いながらも「その子がそれを選んでるんだから」という葛藤もあって具体的な動きをしていなかったけど、でもそれは自分が動かないことの理由にしていたのかもしれないって気づくことができました。そういうスピード感も自分にはないところだったし、でも本当にその関わり一つで、その子の人生が「どちらに進むか」が変わってきちゃうと思った出会いでした。それから、「街歩きスタディーツアー」や「私たちは『買われた』展」に誘ってもらい、お手伝いしながら、自分たちでもそういう活動をしたいと思って動いていました。事情があって自分たちの活動を続けられなくなったときに、Colaboでバスが始まるから、一緒にやらない？って声をかけてもらって、やりたいと思いました。

—どんな想いで活動していますか？

Colaboに関わる前から、若い子たちと関わってきただけで、正直、Colaboに来てから知り得た女の子たちが置かれてる現実、それまでの自分には全然見ていなかったことばかりでした。そう思うと結局は、自分も女の子たちが置かれている環境や、社会の問題を見てこなかった1人だったなということに、まず気づかされた。でも、そこから始めるしかないから。そういう社会を作ってきたしまった1人の大人であるということを受けつ、ここからまたやれることをやりたいなって思っています。

—活動する上で、心がけていることはありますか？

私はあまり自分の葛藤を言葉にするのが得意じゃないけど、振り返ることをちゃんとしようと思っています。女の子とやりとりする中で、判断を間違えたり、失敗することが何度もあります。そうしたときに、ゆめのちゃんに指摘してもらうことで、振り返る機会になっています。出会う女の子たちの多くは、これまで散々いろんな大人に相談したり、SOSを出してきて、それを見過ごされたり聞いてもらえなかったりしてきているから、Colaboは連絡してくれる子にとって、大切なつながり、最後の砦だと思っています。Colaboがその子に、「他の大人たちと一緒にじゃん」って思わせたら、本当にその子たちが頼る人たちって、都合のいい言葉を言いながら性搾取するような人しかなくなっちゃうだろうなって思う。そう思っているのに、自分が判断をミスして、そう思わせちゃうやりとりをしたことがあって。「力になりたい」と思いながらやっているつもりでも、私の力が足りなかったり、想像力のなさで今の状況を変えるための力になれていなかった。あとから、自分に足りなかったこととか、「力になってくれないんだな」って思わせちゃったかもしれないと思うことが何度もあって。そうなったときに、そのミスを振り返ったり、受け止める人で、ずっとありたいなって思っています。いろんなことを言い訳にして、「自分たちは悪くなかった」と言う大人っていっぱいいるけど、私は自分のしてしまったことを振り返ることも含めて、女の子たちと関わ

る場にいるつもりだし、いさせてもらっているという気持ちだから。振り返ることをしない自分にはなりたくないと思っています。

—Colaboの雰囲気を一言で表すと？

ぱっと見、ゆるい。女の子たちにそう見せたいのは、親しみやすい雰囲気を作りたいなと思うから。喋り方とか姿勢とか、ファッションとか、結構ゆるいなみたいな。相談機関の多くは、白い壁で、かっちりしてて、そこにいる大人はある程度しっかりした服着てて、みたいなところを女の子たちは見てきていると思うから。だから、女の子たちと出会ったときに「大人だけど、大人なの？」って感じられるような雰囲気であってほしいなと思います。

でも、キメるときはキメる。話のわからない大人や女の子を傷つけるような発言をする大人を目の前にしたときには、女の子たちの前でもその大人に対して怒ることもあるし、女の子たちに対しても、生活や仕事のことで、本当にそれでいいの？と迫ることもある。それがColaboかなって。児相や役所の大人に強めの交渉や抗議をする姿は、もちろん状況によるけど、女の子たちに見てもらってもいいかなって思ってます。相手の大人とやりとりしたあとで女の子と2人になったときには、その大人に対して感じたおかしさを共感し合ったり、「お腹すいたね〜」などと言って、大人たちと話すときには「なんか喋り方変わってる」みたいな感じで、雰囲気のメリハリはすごく意識しています。私たちみたいな大人もいるんだというのも見てもらいたいし、私や女の子に対してすごく威圧的な態度で対応していた人が、議員が動いたらいきなり態度を変えて、へこへこしてくるみたいな様子を見て、「大人の怖さをみた」と女の子たちが言っていたこともあります。

女の子たちと向き合って話さないといけないことがあるときも、話すときは話すけど、それを引っ張りたくはないなって思っています。言うことは言うし、所々でチクチク笑い話のようにしていうこともあるけど。でも、話した後もいつまでもグズグズ言い続けるみたいなことはしたくない。だからその分、しっかり話す時間を作る。そこも、ゆめのちゃんのやり方を見て学んだところ

ですが、これまでは本人が逃げたら「また次でもいいかな」くらいに思ってた。今そうやって逃げるんだったら、それでもいいかなと思っていたんだけど、まじで、ゆめのちゃんは逃がさない(笑) がしっと腕掴んで。そういう姿を見ていて、話すべきことがあるんだったら、そのタイミングで、ここでしっかり話そうみたいなことはColaboに入ってから学んだことですね。その方が、変に引っ張らないし、そこで話しかれた方がいいなって。

今まで「子どもが逃げたから、それでいいや」って思ってたのは、本当にその子にとって良かったのか、自分の逃げでもあったかもしれないってColaboに来て振り返るようになった。自分がそれ以上のやりとりをするだけのパワーがなかったり、覚悟がなかったりとか、自分の逃げがあったなって。ゆめのちゃんは私に対しても、「もっとやれ」「ちゃんと話せ」みたいな。最初はそれが本当にきつかったりもしたけど。でも、だからこそつくれた関係があるって思うから。やれてきてよかったなって思う。

うざいかもしれないけど、そこまでとことん関わる大人ってそんなにいないと思うから。自分が10代の頃にそういう大人がいたかって言われたら、本当に数える程度いたかどうかで、それも大学に入ってからでそれまではいなかったなと思う。こんな風に関わろうとする大人は、この先いないかもしれない。だから、本当に大切にしたい時間だと思っています。Colaboでの女の子たちとの関わりは、他にはない関係みたいな感じもする。

—他の職場や活動と違うところはありますか？

具体的に変えていく、動いていくのはColaboだと思います。ただただ話を「ふん、ふん」と聞く相談の場所はいくらでもあって、そういうのを求めている子もいると思うけど、今の状況を本人が変えたいと思うのであれば変えられる、そのために一緒に動くというのがColaboだし、スピード感もあると思う。他の大人との違いということでは、施設の職員を女の子たちは「大人」とか「先生」と呼んでいて、大人もそれを一人称として使っている場所っていっぱいあるなとこれまでも思ってきていて。その人の考え方とか、その人がどんな

人かとか、その人の価値感は置いといて、施設や団体のルールや意見を言う大人っていっぱいいる。

Colaboでは、女の子たちからまとめて「大人」と呼ばれることもなくて「ゆめのさんがこう言ってる」「稲葉さんからこう言われた」「わかちゃんはこう言ってる」みたいな。もちろん、女の子たちの状況や、これからColaboとしてどう関わっていくといいのかは、共有しながら相談していることもあるけど、Colaboは「私」で接することができる。ゆめのちゃんっていう人間が見える、稲葉さんっていう人間が見えるみたいな感じかな。前の仕事も「私」として関われることに魅力を感じて活動していたけど、その人自身の意見や価値観が見えない大人たちってたくさんいると思う。この人本当はどう考えているの？みたいな。児相や学校の先生に多いなと思う。もしかしたら、長く付き合っていけば、違ってくるのかもしれないけど、どの大人も同じような感じがする。そういう場所っていっぱいあるなと思うと、Colaboはもしかしたら、女の子たちにとって新鮮かもしれない。

—活動を通して、自分自身の変化はありますか？

待ちの姿勢ではなくて、こちらから踏み込むコミュニケーションもだし、例えば大人に対して、児相とかを動かすときに、こういうことをこういうふうに言う必要があるんだというのは、Colaboに入ってから全て学んできました。「自分がそこで粘らなかったら、今ここに一緒にいるこの子の力にならない」って思うと、粘らざるを得ない。そういう強さみたいなところは、Colaboでの活動を通して前より強くなったかもしれない。

—女の子たちから学んだことはありますか？

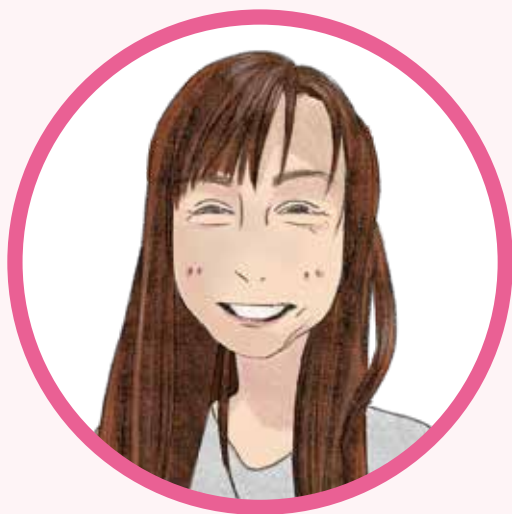
みんな力があるなと思います。ここまで生き抜いてきたことだけで力があるんだけど、やっぱり私はColaboが主催した日韓シンポジウムのときに、関西の支援団体の代表の男性が「買われる」女の子たちの現状を笑い話のように言った問題発言に女の子たちが抗議した、あのときの女の子たちの姿がずっと頭の中に残っていて。あのときのみんなの眼差しとか、言い方と

か姿勢とかが鮮明に覚えていて、「こんなにも強いのか？」って。あのとき、その男性に対して「こんなことを女の子たちに言わせてんじゃねーよ」という怒りも感じたけど、女の子たちの持っている力っていうか、こんな大人に向き合おうとしていることもだし、それは自分たちのためだけでなく、その後ろにはきっと、自分たちと同じような境遇にある他の女の子たちへの想いもあって、そういうものも背負いながらあのときあの大人と向き合っていたんじゃないかって。それまで、何回も何回も言葉にしながら、Colaboで話をしたり、企画展や講演会で伝える活動をしてきての集大成みたいな感じじゃなかった？あれって、女の子たちが元々持っていた力でもあると思うけど、それを出す機会もこれまでなかっただろうし、「それってあなたの力だよね」って、認めてくれる人もいなかっただろうし。ゆめのちゃんとかが一緒に言葉にして、繰り返し話をしてくて、色々な出会いを通して感じたり、講演で自分が話したときの反応を見て、もっと伝わる言葉を考えたり、その子一人で作り出せた言葉でもなく、他の女の子たちとも一緒にやりながら、それを言葉にしたときのパワーって、やっぱりすごかったよね。そのときだけでなく、

他の女の子たちに対しても、それぞれが持っている力を日々すごく感じる。でも、それは本人たちの中でも意識されてなかったり、使う機会がなかったりして、今までいろんなところで評価されてきてないから、自分でも自分の力を感じてないことっていっぱいあると思うけど、いつも力を感じるし、たくましくなってると思う。そういう姿からいつも学ばせてもらうことが多いです。

—活動を通して感じている社会的な課題と、それに対してどう取り組んでいきたいですか？

行政も児相も、何もかもが機能してない。現状を変えていかなきゃいけない責任もあるし、変えていけるんだってということも、私もColaboの活動を通して実感しています。声をあげないと変わらないし、声を上げ続ければ変えられる。いろんな大人たちとも、そこを共有したいと思います。これから大人になっていく女の子たちも「声を上げていいんだ」とか「おかしいと思ったときにおかしいと言えば、状況って変わるんだ」と知れる機会にもなっていると思います。本当、「大人たち、何とかしようよ!」って思う。みんなで動けばさ、もっともっと変わると思うんだけど。



美奈子さん

HPやメール、SNSなどからColaboに寄せられる相談の窓口を担当しています。

—Colaboで活動するきっかけは？

私はもともと、ゆめのちゃんが高校中退後、10代後半を過ごした予備校で働いていたので、ゆめのちゃんとは15年以上の付き合いです。当時は担当していたゼミにゆめのちゃんが毎週来ていたので、そこで作業をしながらいろいろな話をしました。また、当時は講師やスタッフと気軽に話せる喫煙ルームという名の交流の場があって、そこで「昨日どうしてた？」など日常

の話をきいていました。この大人には話しても大丈夫と安心してもらえるよう、縦の関係ではない、ナナメの関係を心がけていました。友達のような、姉のような、当時はそういう関係でした。ゆめのちゃんがColaboの活動を始めて「いつも応援してるよ！何かあったら力になるからね」と伝えていて、去年はシェルターで暮らす女の子たちの高卒認定に向けた学習支援をお手伝いしました。昨年度末にColaboに誘われて、即決して、20年以上務めた仕事を辞めてColaboのメンバーになりました。即決して、20年以上務めた仕事を辞めてColaboのメンバーになりました。

—どんな想いで活動していますか？

一番大事にしているのは、女の子たちが相談して来るはじめての窓口なので、どんな話でも丁寧に聞こう、安心してもらえるような対応をしようと心がけています。自分の置かれている状況を文字や言葉で的確に表現できる子は少ないので、一文であったり、ポツポツ話してくれる単語をつなぎ合わせ、「こういうことかな？」って確かめながら状況を聴いています。はじめはすごく戸惑うこともありましたが、これまでの仕事では、安心感をもってもらうために少しずつ距離を縮めるように時間をかけて生徒とかかわってきました。1年単位で同じ場所に来る人が相手であったので、たとえまずい対応をして失敗したとしても、関係の修復をするチャンスは待っていれば訪れますが、Colaboでは失敗したら関係はつなげられません。1度きりのチャンスしかないのです。はじめはどこまで聞いていいのか、どんなことを聞いていいのか判断が出来なくてしんどい時期もありました。しかし、大事にすることは同じでした。スマホの向こうにいる会ったことのない相手を想像しながら、反応を見ながら少しずつ近づいていくように、やり取りをしています。判断に迷うときは、ゆめのちゃんとわかちゃんに聞いています。二人からいろいろと勉強させてもらっています。これからも修行の日々が続きます。

—活動する上で、心がけていることはありますか？

スタッフとして…。そういう枠組みの中に自分を置いて考えるのが苦手なので意識をしたことがないな。前の職場でも「河合塾の一員」という考えに違和感がありました。もちろん、そこには愛着もあり、大好きでした。でも、例えば社員証をかけることにも抵抗があって、キティちゃんのシールを貼るなどして私好みにしていました。上からの押し付けに慣らされたり、与えられたことを考えずに受け入れることは、まずいことだと思っています。Colaboでも、Colaboのことを大切に想っている一人として、その窓口が私の役割という責任をもって仕事をしています。

—仁藤：組織のためとか、組織の人としてじゃなく、自分として活動している。そういう人だからいいなって思うし、Colaboはそういう人の集まりですが、どうしてそういう人になったんですか？

どうして？うーん、私は一度も就活をしたことがないです。大学生のときに塾の講師とか家庭教師を掛けもちでやっていて、そのうちの一つの塾から学生だけど主任にするから、うちの塾1本でやってほしいと言われたの。時給もいいし、自分のスタイルで出来るから卒業後も続けていました。私は、目の前の子どもにどうしたいのかを直接聞いて、何ができるのかを考えることが重要だと思っています。大人の都合で子どもを利用するのは許せない。そういう私を気に入って採用したはずなのに、いつの間にか利益重視の考えになってしまった塾長と言いつつ、日々辟易して辞めました。その直後、23歳のときに自分で塾を立ち上げました。そういう生き方しかできないのだろうね。みんながこうするから、わたしも倣うみたいなことが私にはできないんだと思います。

—他の職場や活動と違うところはあるですか？

前の職場と比べると、Colaboはみんなめっちゃ働いてると思います。自分もわりと働くタイプだけど、どの人もすごい働いている！って驚きました。違いを感じたのはそれくらいかな。すごく異なるってことや違和感はありませんでした。むしろ初めてColaboに来たときに、すごく懐かしい感じがしました。今となっては、その予備校でも作れなくなったあの頃の居場所としての雰囲気Colaboにはあって「ああ、ここで継いでるんだ」と思いました。

—活動を通して、自分自身の変化はありますか？

ちゃんと相手の言葉を聞こうということですかね。私、人の話を全然聞かなかったり、思い込みも激しいし、最後まで聞かずに「こうじゃない？」みたいなところがあるので、本当に気をつけていて、ちょっと変わってきた気がしますね。ワンクッション置けるようになったというか。でも、テンパると大変、慌てると失敗するので、一呼吸おくことにも気をつけています。心配な子がいると、家に帰ってもLINEでやり取りしたりもします。その子のことが心配だし、返信来たかな？と気になるから。相手もこちら、ちょっと安心かなって思えないと、やり取りを終えられないですね。

私にはまだできないことも多いけど、勉強しないと変われない。勉強っていうのは座学の勉強じゃなくて、世の中のあらゆることに目を向けて考えることで、それをしないと終わってしまう。人間なんだからね。考えていかないとね。私もこれまで、そういう大人たちに出会ってきて、私ももっともっと、まだまだなにかできるんじゃないかなって思っています。

—仁藤：美奈子さんは、Colaboで一緒に活動しない？ と誘ったとき、定年があるかを聞いてきましたね。「定年はないから、歌舞伎町の名物おばあちゃんになって」と私は言いました。(笑)

いいね。それ聞いて、わくわくしました。夢は可愛いおばあちゃんになること。

—Colaboの雰囲気を一言で表すと？

協働共育、協同共食。お互いに助け合って育ちあう。一緒に汗を流して働いて食卓を囲んで食べる。この言葉は私にとって、Colaboを表す言葉ですね。もう一つ言うと「もみいろの止まり木」。羽を休めるところ。女の子たちが来て、ここでみんなが寝転がったりして、いいよね。そういう空間が好き。女の子たちがいっぱい食べているのを見ると、ああ良かったねって温かい気持ちになる。コロナ禍で、今はなかなか思うように活動できないけど、協同することで、お互いに分かち合えたり、お互いの違う部分を認め合えたりとか、そういうことができるってことが「共育」で、Colaboはそういう場所だと思います。

—活動を通して感じている社会的な課題と、それに対してどう取り組んでいきたいですか？

私はずっと教育のこと、不登校や家族のことを考えてきました。Colaboで出会う女の子たちにも教育を受ける権利もあるのに、受けられてないことを常に感じます。あなたには権利があるよと伝えて行きたいし、そういう視点を大事にしながら、どうこの活動に関わっていくか、支えていくかは課題だなと思います。

「こうします」みたいなことは言えないけれども、今やっていることをコツコツやるしかないと思っています。Colaboの活動で、ゆめのちゃんが担っていることの一つは、外に向かって広がっていくことだと思うし、私がやっていることは中で支えることだと思うので、それを一生懸命やるのが、社会の問題に向き合うことに繋がっていくかなと思っています。家に帰りたくない子が安心して気持ちを休める場が当たり前のようにある、そんな世の中をつくりたいですね。



太田さん

バスカフェの賑やかしをしています。
バスに来た子たちを和ませて、ときどき
物品を渡したり、いろいろお話ししたりとか。

—Colaboで活動するきっかけは？

ゆめのさんとはゆめのさんが10代の頃、フィリピンの女性たちを支援していた友人を通してすれ違って、私が夜間定時制高校のドキュメンタリー映画『月あかりの下で』を作ったときに観に来て声をかけてくれて、Colaboとの関わりが始まりました。はじめはColaboの映像を撮影していたんですけど、いつの間にか一緒に活動していました。(笑)

—どんな想いで活動していますか？

Colaboに関わる前から、貧困状態にある子どもの学習支援や生活支援に関わっていましたが、Colaboで女の子たちと出会って、自分の知らなかったところで、こんなにつらい想いをしている子どもたちがいることに衝撃を受けたし、私ももう60に近いですけど、これまで生きてきた社会のなかで、こんなに積み残した課題があったというか、性搾取もずっと続いているし、そういうものを残して来てしまった責任をすごく感じています。自分が変わらなければと。その状況をなんとかしたいという気持ちと、この社会に生きる大人として、ちょっと先を生きてきた大人として、果たしていかなきゃならない責任をいつも感じながら活動しています。

女の子たちには、本当に居場所がないんですよね。生活は困窮していなくても、ものすごい親からの束縛を受けて家にいられない子どもたちや、家を出る背景にものすごい困窮や家庭内での性虐待があったり。これまで自分がしてきた学習支援のなかでは表に出ない、見えていないこともあったのかもしれないけれど、触れてこなかった。これはもう、ほっとけないっていう気持ちですね。

女の子たちを買う男たちも、ずっと昔からいたんですよ。でも私自身も、そういう男たちに対峙する活動に共感しながら、結局、そのオヤジ目線を自分自身も取り込みながら生きてきちゃったなと、Colaboで活動するなかで反省させられます。買春についても「オヤジが行くのもしょうがないか」というように結局許しちゃってたわけだね。「行くの？」って、言わなかった。例えばPTAの活動でも、そういうことがネタとして話に出ると「えっ」と思っても「なんでそんなこと!」と糾弾もせず、笑って話したりして。そう来てしまったことで、今の若い世代にツケを負わせていると感じています。これまで見て見ぬふりしてきた私たちの責任だと思うんですよね。今、若い人たちが活動しているけど、そういう世代の責任として私も一緒に声を上げたいし、「今まで何してきたんだ」と、もっと同世代の人たちにも訴えていきたいと思っています。

—活動する上で心がけていることはありますか？

私の役割は、賑やかし。緊張してくる子たちとか、本当にコミュニケーションが苦手な1人に来る子たちもいるので「楽しくて、いていい場所なんだよ」ってことを伝える、そういうとりあえずのファーストコンタクトっていうか。ついつい、いろいろ聞きたくなってしまうことが多いので、気を付けています。

Colaboの活動のなかでは、女の子にとってなにか良くないことをしてしまったときに、いろいろみんなははっきり言ってくれるから、ありがたいです。多分、他のところではそういうことがあっても、はっきり言ってくれないと思うんだよね。「この変なおばさん、また言ってるよ」と

関わらないようにして、それっきりみたいなことが多いと思うんですけど、Colaboでは「それはちょっとおかしいんじゃないの」と、その都度指摘してくれるので、すごくありがたいなと思っています。そういうことがなければ、自分に内面化されたオヤジ目線にも気づけなかったと思うんですね。そういう発言って、まだしてしまうんじゃないかなと思いますけど、そういう自分をなんとかしたいと思います。

—活動していて、嬉しかったことはありますか？

やって良かったなっていうのは、バスカフェで女の子たちの名前を覚えていると嬉しそうにしていたり、「久しぶり」と言っている話してくれたりとか。そんなにすぐ人生は変わらないけど、なにがちょっとしたきっかけになっていたら嬉しいなとか、なにがあったときにそれまでの関係性があって、思い出して連絡くれたりとかね。そういうことでいいと思うし、その子たちが大人になったときに、こういうことに関心を持ったり協力したいと思ってくれたりするのかなっていうほのかな期待があったり。楽しいですね。いろんな子たちと関わって、今の世の中の話をしたり、流行り言葉を聞くのもすごく楽しいし、私も若者言葉を使うチャレンジをしたりしてるんですけど「それは違う」と言われたりね。(笑) 上下関係じゃなく、フラットに関われるっていうかね。そういう関係のなかで話ができるように、自分でもどんな場でも気をつけています。支援が必要なときも、言いやすいように。

—Colaboの雰囲気を一言で表すと？

あったかい。暗いところに関わっているんだけど、明るく楽しく。ぽかぽか。でも、厳しいときもあるから、麻婆豆腐？ピリッと辛くて、ぽかぽか。いろんな人がいて、ごちゃごちゃ。お互いに楽しくというか、なんとか女の子たちを支えようということで、みんな頑張ってる感じがあるから、ハロハロ！バスカフェは、ピンクの綿飴。

—Colaboのスタッフ同士の関係はどうですか？

人間関係が悪いと、支援はできないと思います。スタッフ同士の繋がりはすごく大事なんじゃないかな。みんなに対応するっていうのかな。一人よがりじゃなくて、みんなでいろいろ相談しあってやっていけるのがすごく

いいんじゃないかな。

—他の職場や活動と違うところがありますか？

すごく楽しんで、自分自身も勉強しながらやっていると思います。バスの活動も、本当に自分がやりたいことで、楽しく子どもたちと関わりながらやっています。私は、1年8ヶ月ぐらい会社員をやったことがあって、それがすごく無理だったんですよ。ずっと机に座って電話を受けたりとか、すごくつらくて、その後フリーになって映像の制作や出版に関わって、結婚してからはボランティアとしてフィリピンの女性たちのDV被害の問題などに関わって。自分が納得できないことはできないし、やらずに済んできたのかな。人との関わりが楽しいから、自分が活かせるところをColaboで活かしてもらっています。

—活動を通して自分自身の変化はありますか？

Colaboに関わらなかつたら、相変わらず使っていたような「ネタ」など、自分が何気なく発言したことを指摘されるなかで、自分のなかにある問題に気づかされました。そういうことに自分自身が気づくように、気を付けるようになっていきます。

—女の子たちとの関わりの中で感じることはありますか？

出会ったときは、自分の内面やつらいこととかは言わないですね。長く一緒に活動したり、高認の勉強と一緒にずっとやったりするなかで、泣きながら家のことや抱えていたことを話してくれることがあって。何気ない時間を一緒に過ごしてきたから、そういう積み重ねが大事なかなって思いました。はじめから「どしたの、どしたの」とか「なに？なに？」とか言うのではなく、関係性のなかで出てくるというのが大事なことです。

そういう場があっても、ずっと偽って生活してきた子は戸惑って出ていっちゃうこともあるけど、落ち着くまでには時間がかかる。ひとりで抱え込まずに、彼氏からのDVを「こんなことされてるんだよね」と、相談というより「ポロッ」と言える家族みたいな関係になっていますよね。関係がずっと続いていく、家族みたいなつながりを本人たちが受け入れて、そこから変わっていく。自分の過去を振り返ったり、自分自身を見つめる余裕が出てく

るんだと思うんですね。過去のいろんなこととか、自分のことをいったん見つめて、そうでないと前に進めないんじゃないかなと思います。深い傷やトラウマのある子も多いから、精神的なケアを含めて、Colaboが果たしていく役割が大きいと思うんですけど、そういう関わりがあるから、次の一歩につながるんじゃないかなって、すごく思いますね。

Colaboで本当に、すごく大切にされてるって想いが、女の子たちにとって大きいんじゃないかなと思って。お誕生日を祝ってもらったりとか、おいしいご飯と一緒に食べたりとか、自分は大切にされているって感じられる関係性を得られないできた子たちが多いから。だから、そういう女の子のケアの仕方っていうのかな。一人ひとりに「大事だよ」というメッセージを届けるっていうか、それがColaboの活動としても大きなことなんじゃないかなって思う。

Colaboのいいところは、ゆめのさんが表舞台に立ってね、しっかり児相の問題や男性の買春の問題などを発信しているから、そういう姿も女の子たちは見て、一度出て行っても、帰ってきてるじゃないですか。支えられる側から支える側じゃないけど、女の子たちも一緒に活動をしている、それも他ではない、Colaboのすごく大切なところですよ。

—活動を通して感じている社会的な課題と、それに対してどう取り組んでいきたいですか？

この世の中は、ひどいよね。家に帰れないでいる女の子たちに声をかける男たちが今もすごくたくさんいるのに野放しになっていて、女の子たちを危険に追いやっているのは大人なのに、罪や責任を負わせられるのは子どもたち、女の子たちだから。きちんと糾弾して変えていくために声を上げ続けたい、活動を続けていきたいなって思いますね。

最近も男性国会議員が「50歳近くの自分が14歳の子と性交したら、たとえ同意があっても捕まることになる。それはおかしい」などと性的同意の年齢に関して発言しましたが、ふざけんなど。こういう人たちがいつまでも政治の中枢にいたり、法案を通すときも数の力で理性のない判断がされていく状態を正していかないと、社会を変えていけないですよ。Colaboは小さい活動かもしれないけど、そういうところも意識しながら、ゆめのさんが国会議員や地方議員に働きかけて動かしていて、そういうところも大事にしていきたいなと思っています。ゆめのさんがいつも矢面に立って、その分活動されることを嫌がる人たちからの攻撃も相当なものがあるなかで、本当に頑張ってくれているので、支えていきたいと思っています。



市川さん

週2回、女の子たちにご飯を作っています。

—Colaboで活動するきっかけを教えてください。

知り合いからご飯を作ってくれる人を探していると聞いて、はじめは自分が誰かを見つけるという依頼だと思っていました。でも、周りに頼める人がいなくて「いいんだよね」と話したら「市川さんはどうなの？」って言われて、「私だったの？」みたいな感じで。それでColaboのことを調べて、面接でゆめのさんとお会いしたときに、何年前にNHKのドキュメンタリーに出ていたのを見

ていたことを思い出しました。この人知ってる、ますますお手伝いできればと思って。

社会と繋がっていたいという思いはずっとあって。私は30年以上専業主婦だったので、得意なものを活かして何かしたいと思っていました。家にばかりいても、やることがないんですよ。だから、何かしたいなっていうのも思っていたんですね。ただそれが何なのか、わからなくて。事務系は好きじゃないし。実は半年間だけ、お弁当屋さんで働いたことがあるんですが、それ以外はほぼ家で。夫の両親とも一緒に暮らしていたので、なかなか女性が外に出るっていうこと、母親が子どもを置いて外に出ることが理解されない昔の人だったので。今年は自分が一生やっていこうと思えるものを見つけたい、お料理をすることが好きなので、それで何かできないかと思っていたときに声をかけられて、これだったんだって。

—Colaboで活動してみようですか？

すごく楽しいです。ご飯を作ると、「おいしい」って言ってくれるのが、本当に自分にとって生きがいの一つになっていて。そういうふうにならえてもらえるのが、すごく励みにもなりますし、やって良かったんだと思える。張り合いもあるし、何を作ろうか考えるのも楽しいです。女の子たちから、自分が作ったことないものをリクエストされたときも、ネットで調べて作ってみたり、挑戦の気持ちもあるし、生活にもメリハリがでて、私はColaboに来てから、ますます元気になった気がします。

—Colaboで出会う女の子たちの印象は、はじめどうでしたか？

はっきり言って、普通の子だなと思いました。だから、背負っているものがあると知ったとき、背筋が寒くなった気がします。女の子たちは、本当に普通なんですよ。笑うし、話しかけたらちゃんと返事するし、すごく反抗的とかじゃないし。でも、関わるなかで、一年ぶりの手作りのお料理だとか、一年以上ホテル暮らしをしていてコンビニのお弁当しか食べたことがない子がいるとわかって。それから出来る限り家庭的な、普通のご飯を食べて、ほっとしてくれたらいいなっていう気持ち

でいます。

食事がおいしいと思えるのは、料理の味だけじゃなくて、どういう家で誰と食べるかが大きいと思うので、嫌いなものを無理して食べるより、食事ぐらいせめて楽しく、好きなものだけを食べたいっていうことでいいと思っています。でもバランスも大事なので、食べられる範囲でお野菜とかも食べてみようかなと思ってもらえたら。

子どもたちには、いつも笑って、みんなから愛されてるっていう思いを持って生きてもらいたいなと思っているので、愛情を持って接したいし、お料理も心を込めて作りたいなって心がけています。もちろん子どもたちのためにあるんですけども、スタッフの健康もなくしては活動できないので、スタッフの皆さんにもできるだけ美味しいものを提供したいと思っています。

女の子たちは、寂しがり屋なのかなと思います。自分の愛する対象を見つけたがっているのかな、そういうものを探してるのかなっていうふうにも思います。誰かに愛されたら、きっと誰かを愛したいと思うんだと思います。何かに夢中になりたいって想いがあって、いろんなものを見つけるんだけど、真実じゃないから長続きしないのかなって。理解してくれる人が現れるといいなって探し続けているように思います。諦めたらそこで終わりなんだけれども、探し続ければ、自分にも幸せになるチャンスがあるんだという気持ちを持ち続けて生きて欲しいなって思います。

—Colaboの雰囲気はどうですか？

子どもを第一に考えているとすごく感じます。みんなが諦めることなく、子どもたちと一生懸命関わろうとしている姿を見ると、日ごろの大人は辛抱が足りないなって。わかちゃんも子どもたちと一生懸命話していて、いつも同じようなことを言われても「そうだよね」って話を聞いてあげている。そういう姿を見て、きっと親だったら「また同じこと言って」と言っちゃうようなことや、自分の子育てでも「家族だからいいや」とつい思ってしまうところがあったというか。ときとして感情的になって、子どもたちにぶつけてたんじゃいかなと振り返ることもあって。やり直すことはできない

けど、今から変えることはできるなって。人間っていつでも変わることができる。自分を変えることができる。これからもそうありたいなと思っています。

女の子たちは、Colaboでは、家の中でくつろいでいるような姿ですね。ソファで寝そべったりとか、スマホ見てたりとか。それがすごくいいなと思ったんですね。ここなら安心していられるんだな、それがColaboの良さだなって。家でそういうことが出来ればいいんだろうけど、怒られたり「いつまでもゴロゴロしてるんじゃない」と言われちゃったり、家で窮屈なのってどうなのと私は思いますけど、うちでも息子が、いつまでもゴロゴロしていて、掃除ができないと蹴飛ばしたくなりますけどね。(笑)

—Colaboでご飯を作るなかで、女の子たちが変化していると感じることはありますか？

私はまだ1年しかお付き合いしてないし、女の子たちの事情を深く知っているわけではないけれども、変わっていきなって思います。例えば、昼夜逆転の生活をしていたり、好きなことがなくて、いつも中途半端になってしまっている子がいて。いつも本当に控えめで、常に何かに怯えているような感じで、自分から発信することがなくて、私に話しかけてくることもなかったような子が、仕事に行くようになって、私にもいろんなことを話してくれるようになったりすると、少し心を開いてくれたのかな、「自分もやればできる」という自信が少しついてきてるのかなって感じます。繰り返したようなことを言っている子が、また同じことを繰り返してようだけど、発言がちょっと変わっていったり、今までは投げやりだったのがそうではなくなったりとか、そういう変化はすごく感じます。

きっと子ども達にとっても、ゆめのさんとわかちゃんとは違う存在。もちろん稲葉さんもだし。それぞれ違う存在として関わっているのが、子どもたちにとっていいのかなって思います。ゆめのさんはきっと、怖いけど頼りになる。わかちゃんには、本当に何でも言えて「これ言うとうめのさん怒るけど、わかちゃんなら大丈夫」みたいな。いろんな人がいて、そのなかで育っていく。「この人はこういう人だから、じゃあ自分はこういうふ

うに話そう」とか、そういうことを知っていくことも大切だと思います。

—仁藤：みんな市川さんには甘えていて、さっきも「おかわり、ちょうだい」じゃなくて「チキンがなくなった!」とお皿を出してアピールしていましたね。

全然いいんだけど、そういうのは家では怒られますもんね。施設では「残しちゃいけない」「野菜を食べてない人はおかわりダメ」とか言われてきたかもしれないけど、気分がよければ嫌いなものも食べるし、気分悪いときはやっぱり嫌だろうし、まあそういうもんだよねって。毎日同じじゃないじゃないですか、人の心なんて。だからそんな感じでお付き合いしてますけど、こちらでも一律の対応ではなく、適当っていうのが良いかなとも思います。でも、「味噌汁絶対飲めない」という子が、試してみたら「これなら飲めるかも」と言ってくれたりするとすごく嬉しいですね。

私はあまり女の子たちの事情を知らないけど、知らなくてもいいこともあると思っています。全てを知っていて、それに対応する方がかえって変かな。今いる目の前の子どもたちの姿を見て、私が感じていることを伝えた方がいいのかなって。だから自分からはあんまり、「何かあったの?」とか聞かないようにしています。必要があればきっと話してくれるだろうし。うるさいお母さんは一人でいいと思っているし、私の役割は、無償の愛で食べ物を提供するおばあちゃんだと思っているから。

—仁藤：みんなにとっての、おばあちゃんですよ。女の子たちの逃げ場にもなっていると思います。私に厳しいことを言われて、ちょっと気まずいときに「食べる?」と声をかけてくれたり。Colaboが他の活動や大人と違うと感じることはありますか？

受け入れてもらえる安心じゃないですか？ 自分を否定されないっていうか。やっぱり否定されたら辛いんですよ。たとえそこで3度の食事が出たとしても、お風呂に入れるとしても、精神的なものが一番大きいのではないかなと思います。Colaboの居心地はいいんだろうなと思うし、手を差し伸べてくれる。自分が手を出さずすれば、その手をしっかり掴んでくれる安心感が

あるのかなと思います。見捨てないじゃないですか。それが伝わっているんじゃないかなって思います。

—仁藤：女の子たちが、Colaboの人は「仕事としてやっている感がない」ところが他と違うと言っていて、それってなんだろうと考えてみると、楽しんで、やりたからやっていますよね。

それが子どもには伝わるんだと思います。だってね、仕方なくやってるのと、この子たちというのは楽しいと思ってやっているのは全然違いますよね。そういうのも子どもの方が敏感に感じると思うんですよ。児相だって、本当にその子を一人の子どもとして、人間として見て相談に乗ったら、それは時間もかかると思いますけど、サラリーマンですからね。その時間時間で区切られて、はい終わり、みたいな。それは子どもはすぐ察知しますよ。この人、自分のことしか考えてないなって。人と人との関わりということですよ。機械的じゃなくって。だから、私たちだって腹立つこともあるし、怒るところもあるし、虫の居所が悪くてちょっと機嫌が悪い日だってあるわけですよ。まあそういうのもお互いに認めあって「なんか今日ちょっと機嫌悪いから、言うのやめとこ」と女の子が思っていることも、ひょっとしたらあるかもしれないですよ。

スタッフ同士も平等で、良い職場だから子どもたちにとってもいいんだと思います。目的が同じじゃないですか。子どもたちのために何かしようって思って集まってる人たちだからいいのかなって思います。

—女の子たちは、冷たい大人にばかり出会ってきているけど、市川さんのように、何かしたいと思っている大人は他にもいるのでしょうか？

いると思います。ただ、知らなかったり、もう一つ勇気が出せない。そういうことってあるんですよ。そんな自分を恥じているし、本当に情けないなって思っています。何かしたいと思っている人はいても、ただその最初の一步が踏み出せない。

自分はこんな年だけれども、まだ未熟なんですよ。だから、いろんな人たちにいろんなことを教えてもらって生きていくしかないと思っています。完全な人間なんて、この世の中にはいないですけどね。みんな何かを欠いていて、だからこそ楽しいし面白いし。完璧な人には支えもいらなわけだからね。誰も近づかないだろうし。自分に抜けているところがあっても、まあいいか、人間だし、みたいな。大人たちにも一歩踏み出してほしいですね。



綾さん

バスのスタッフとして、
ご飯の準備や物品を渡しています。

—Colaboで活動するきっかけは？

知人のFacebookで活動を知ったときから応援していて、2014年に夜の街歩きスタディーツアーを申し込みました。私は「慰安婦」問題についての活動を2000年代からやっていて、そのときは韓国で暮らしていました。2016年に「私たちは『買われた』展」が始まったとき、「慰安婦」問題の展示がきっかけになったと報道で読んで、

嬉しかったです。それまで日本でそういう活動はなかったのです。2017年9月にColaboが韓国に来たときに通訳をして、韓国のバスと一緒に見に行きました。東京に戻ってきて2019年2月からバスの活動を一緒にしています。

「慰安婦」のおばあちゃんも、今Colaboとつながっている子たちも、時代が違うだけで状況はあまり変わりません。もし「慰安婦」の問題に今の時代で取り組もうと思ったらColaboのように性搾取にあうかもしれない最前線にいる女の子たちを支援することだと思います。

—どんな想いで活動していますか。活動する上で、心がけていることはありますか？

困っていてもどうしたらいいかわからない子に「役所に行けば」と言っても、そんなの無理じゃないですか。そもそも自分は困ってるって言っているのかわからないでいる子たちが「困ってる」と言える場所がいろんな所にあったらいいなと思っています。でも、私自身がその子のその後に責任を取れるわけではないから、勝手にその子の気持ちをおもんばからないようにしています。最初は、いろんな環境の子たちがいることに驚くことが多かったですが、背景には社会的な問題があり、その子自身の責任じゃないと気づかされました。

—他の職場や活動と違うところはありますか？

Colaboを「職場」と思ったことはないです。運動という側面で、韓国と比べてしまうと、日本はスタッフも少ないし、仕組みも整っていないと感じます。でも日本と韓国は歴史が違うし、運動の社会的な位置づけが違うので。韓国の場合は法的な根拠があって公的なお金を取ってやっているというところが重要で、日本が立ち遅れている部分だと思います。

—Colaboの雰囲気を一言で表すと？

「男クソ」とか言っている空間！

—活動を通して感じている社会的な課題と、それに対してどう取り組んでいきたいですか？

若い女性たちの問題を、社会がどういう問題として認識するのか。例えば「援交」や「パパ活」という枠組み設定の仕方自体が問題ですね。女の子たちを買いたい男がいて、そういう男たちにあらゆる選択肢がある社会の仕組みや、辞めたいと思っても他にいい仕事が無かったり、普通のバイトをしても性的なものとして扱われたりする。そういう状況や社会のあり方を問題視しないで、「本人が望んでいるから」と言う人がいる。実際に女の子たちと出会うなかで、そういう社会を変えるべきと、確信を持って言えるようになりました。それを言語化していかなければと思っています。



高島さん

経理と労務を担当しています。

女の子たちが将来に向けて貯金できるように金銭管理のサポートもしています。

—Colaboで活動するきっかけは？

仁藤さんの『難民高校生』を読んで、Colaboのことはずっと応援していました。かなり早い段階でサポーター会員になりました。私は自分の力をなにか社会に生かしたいと思ってきましたが、実力がないこともわかってい

たので、NPOの中間支援組織や企業で経理の仕事を
して専門性を高めてきました。そんななか、Colaboで
経理ができる事務職を募っていることを知って、ぴっ
たりだと思って志望しました。

—どんな想いで活動していますか？

Colaboにつながる女の子達だからこそ見える、感じ
ることを自分のなかに閉まっておくじゃなくて、出せ
る機会やチャンスがあったり、時期が熟したときに
メッセージとして出せるのがColaboの活動だと思うの
で、それを見守っていたいと思っています。

自分が大卒だということもあるけど、正直Colaboと関
わるまで、中卒の子たちに出会ってなくて、存在を見
ていなかったと思います。育ってきた環境も大変だけ
れど、もともと持っている特性や障害も影響している
場合もあって、この世の中で生きるのは、私が生きるエ
ネルギーよりも、もっとすごいエネルギーを使わない
といけなくて大変なんだなと気づかされました。

女の子たちには「お金の人」って思われているかもし
れないけど、私が得意なことはそこだから、それを生か
せるのは自分自身も嬉しいです。

—活動する上で、心がけていることはありますか？

2018年に私が入ってきたときは、まだ色々なことが
整っていないで、基盤を整備しました。予算規模は当時
の3倍以上になっています。次は後輩を育てなくてはと
思っています。

Colaboでは基本的に自分の好きに考えられる、それ
はこれまでの自分のキャリアや考え方をみんなが信頼
してくれているからだと思います。仕組みを作るときは、
自分がどうしたいかでなく、相手がどうしたら使いやす
く、かつ透明性や公平性を保てるかを考えていますが、
Colaboはほんとうにずっと動いていて、女の子たちの
状況や必要なことに応じて形もどんどん変わっていく
から、一回作ったものがそのまま通用しないこともあり
ます。人のために仕組みがあるのであって、仕組みの
ために人があるんじゃないというのは気をつけていま
す。「私の作った制度は完璧だから、みんな従って」

じゃなくって「どうなのかな」って女の子たちや他のメ
ンバーに聞きながらつくっていくのはすごく楽しいです。

—Colaboでの一番の思い出はなんですか？

合宿で飲みすぎて吐いてしまったことですね。(笑)

—仁藤：それ言うんですね。(笑) いつもしっかりし
ている高島さんが泣きながら人生を語り、高島さん
にも色々あるんだな、闘ってるんだなあって、みんな
が思うみたいな。

そして世話されるみたいな。(笑) やってくれてあり
がとう、迷惑かけたねって言ったり、そういうやりとり
ができる関係がいいなというか、そういう大人であり
たいってというか。大人だからしっかりしなきゃいけない
けど、大人になってもダメな部分もあるのを出せるの
が、Colaboの空気感、女の子たちとの関係としてもい
いところだと思います。「あのときキャラが崩壊して
た」と女の子に言われて、恥ずかしい、でもああいう時
間が持てたのは良かったなって。

—Colaboの雰囲気を一言で表すとどうですか？

そのままでもいいよ。まずはそのままでもいいよ。で、
そこから先は一緒に考えていこう。

—他の職場や活動と違うところはありますか？

自分が選択的夫婦別姓制度の導入を求めて活動し
ていることを普通に話せる場所。「活動があるから休
みます」と言っても、理解されるし応援してくれたり、
女の子たちにも自然に話せて、ある子から「親が何回
も離婚と再婚を繰り返してるから、氏がコロコロ変
わって大変だった」と聞いて、なるほどそういう視点が
あるかと教えられたこともありました。

—活動を通して、自分自身の変化はありますか？

今までなんとなくモヤモヤしていたことを言語化でき
るようになってきたと思います。街なかに貼られている
ポスターひとつとっても、前はおかしいと感じても言葉
に出来なかったり、みんなに言うことはしていなかった。

夫婦別姓にしたいと事実婚状態の当事者として記者から取材を受けることも度々あるんですが、男社会が本当透けて見えるようになりました。よく「なんで姓を変えたくないんですか？」と聞かれるんですけど、変える理由がないんですよ。なので、逆にこちらが「あなたはどうして変えなかったんですか」と聞くと、特に男性記者たちからは「なんとなく」と返ってくるので、「あなたは（改姓を）気にしないでいい特権を享受してますよ」と言ったり。そういう言葉を自分が得られたことで、「はっ」とする人がいたり、全員ではないけど「たしかに」と言ってくれる人が増えて、それは社会を変えていくステップになると思っています。

Colabolにいと日常生活、日常の会話のなかでそういう話や場面が出て来るので、考えさせられます。理解のない人たちとのギャップをどうやって埋めればいいのかとか、こういう反応をされるとこんな気持ちになるんだとか、それを女の子たちが大人に言われて嫌だったことと重ねて考えてみたり。まともな人はちゃんと話を聞いたら、ある程度の理解はできると思うので、自分の経験からも言語化していくこと、言葉の大切さを感じています。

社会の枠を自分の枠だと思わされている女性は非常に多いと思います。男性優位の中で作られてきた社会のなかに取り込まれていると、同じ女性であってもなかなか見えないんですよ。「子どもを産まなきゃいけない」とか「夫婦は同姓にしないと（女性が改姓しないと）」というのも、ひっかかることはあったかもしれないけど、そこまで疑問に思わない自分がいたのになって。40年生きてきた私にも社会や時代の空気感が内面化されていないわけがないし、自分のなかで完全になくなったとは言えませんが、アップデートできるかだと思っています。

私は子どもを一人産んで、もう一人子どもが欲しかったんです。でも、それも親が「一人っ子じゃ親として、母親として未熟だ」と言っていたから、自分のなかで複数持たないと親として大人として未完成だという価値観があったんじゃないかと今は思っていて。35歳を過ぎてから、周りが妊娠していくとすごく心がざわついていました。そのときに、自分がざわついていることを認

めたくなくて「自分で産めなくても、特別養子縁組とかもあるし、むしろそっちの方がすごくて」と、女の子たちにもそういうことはあるのかもしれないけど、自分の本当の気持ちを別の言葉で言ったりしていたなと振り返っています。それで児相に行って「特別養子縁組をしたい」と言ったら「別姓の人はできません。法律婚してないと駄目です」と言われて、それならばと、養育家庭として登録しました。

—活動を通して感じている社会的な課題と、それに対してどう取り組んでいきたいですか？

男社会ということもありますが、それと同時に、活動も経済優先の社会構造のなかから完全に出ることは出来ないじゃないですか。法律婚できない中で夫婦別姓（事実婚）をしていると、夫婦や家族の結びつきが強い人たちが多いと感じるんですよ。そして、私が出会った人たちは、海外出張もあるような仕事をフルタイムでしてたり、いろんな資格職の人も多い。一方、専業主婦の人が氏を変えたくないという気持ちを持ったとしても、いろんな場面で「主婦がどこで通称を使うんですか」と言われたりする人もいました。別姓の選択肢がほしい人は、学歴も高いし、仕事でキャリアを積んできている人が多いと思いますが、私はパートの事務のおばちゃんみたいな位置付けで。世間的に見ると、夫に食わせてもらっている人みたいな。そこで、そういう自分だから声をあげちゃいけないって思ってしまう人っていっぱいいると思うんです。そこで黙る必要はないってことも、私の姿を見せて届けたいと思っています。納税しているかと、自分の人間としての権利は別。

子どもについても、児童福祉法の改正前は、大人目線で、面倒を見てあげる、恩恵を授けるという福祉の対象だったのが、2016年の改正で子ども自身が「権利の主体」だということが明確になりました。私は自分の子どもであったとしても、所有物ではないんだって自分に言い聞かせるようにしていて、子どもにも「あなたは権利の主体だから、自分の意見表明権はあるんだよ」と言っていますが、そうしていかないと所有したくなるんですよ。自分のなかに支配者側にまわりたい欲求があることを認めて、どうするかを考えることが大切だと思います。

例えば子どもが学校で、男子が女子を性的にからかったりすることあったと話してきたときに、先生に「プライベートゾーンに関わることだから、知らなかった、楽しかったという話ではない。この延長線上に性暴力であると思いますよ」と伝えて、子どもにも「嫌だ」って言う気持ちは伝えていいよと言ったり、親に言えないこともあると思うから、「親じゃなくてもいい、自分が話せると思った大人に誰かに話してくれればそれでママ

はいい」「一人に言ってみてダメだったら、次の人に話してみて。それはエネルギーが必要かもしれないけど、きっと出会えるから大丈夫だよ」という話もしています。

自分の子どもに対しては、全部私が面倒見る、私が全部知ってないと嫌っていう気持ちがありましたが、Colaboに来てから、それは親のエゴだし、知らないことも当然あるよねっていう視点になってきたかなと思います。



佐藤さん

女の子たちが安全に過ごせるように、環境整備や緊急受け入れの際のシェルターの準備、物品の管理、メディア掲載紙の保管などの総務も担当しています。

—Colaboで活動するきっかけは？どんな想いで活動していますか？

ずっとパートの仕事を探していたんですが、なかなか見つからず、知人の紹介でColaboを知りました。まったく知らない世界だったので、ちょっとずつ理解しているところです。

私は直接女の子たちと関わることはほとんどないのですが、常に女の子たちの命が関わっている、緊急性のある仕事だと思っています。直接役に立つことはないかもしれないけれども、それに繋がる、掃除や過ごしやすい環境を作ったり、その一部を担えればなという気持ちでいます。

—活動する上で、心がけていることはありますか？

女の子たちの貴重な命がかかっているから、あとから取返しのつかないことになったら困るので、私が担当していることは抱え込まずに、全部教えてもらって共有して、できないことは先にできない、わからないことはわからないと全部おおっぴらにするように心がけています。

女の子たちは、大きな傷が心にいくつもあるんだろうけども、目はキラキラしていて綺麗だし、素直で優しくて。それでも、着の身着のまま来たんだな、ここでColaboの手がなかったら、この子はいったいどうなってたんだろうということや、一刻を争ってるんだなと感ずることもありますし、女の子たちが過去に受けた虐待や性暴力の話を聞くと、お話のなかの世界ではなく、現実に、今隣にいる女の子達がそんなに酷い目にあってきたことを目の当たりにすると、すごく切実な問題だと感じます。

—Colaboの雰囲気を一言で表すと？

「すごく濃いピンク」ですかね。外に見えているところは、柔らかくて明るい優しいピンクなんですけど、みんな一生懸命で、スタッフも精神的にも肉体的にも大変なことがあると思うけど、自分のことより女の子のこと、頭の中120%が女の子のことを考えてるんじゃないかなって。経験からくる強さも感じます。あとは意気込みというか、心構えというか、覚悟というか。そういうところも「強いピンク」ですかね。

—他の職場や活動と違うところはあるですか？

女の子の生活、命、大きなものを預かっている。そこは決定的に違うのかな。それと、一人が持っている責任が大きいと思います。他の職場だったら、振られる仕事が点や一部分で、そんなに考えることもなくできると思うんですけど、Colaboでは面で渡されるというか、課題で渡されるというか。これをやるにはどうすればいいか自分で考えてやってみて、わからなかったら相談してって、自分の頭で考えることが増えました。今まで家のことしか考えていなかったのが、久々に働いているっていう感じがして嬉しいです。スタッフ同士の関係性はすごくいいですね。みんなとにかく心が優しいし、気遣いができる。それが全てかなという気がします。

—活動を通して、自分自身の変化はありますか？

ニュースを今までと違う角度で見たり聞いたりするようになりました。生理の貧困や女の子のこと、差別の問題、差別をされる側の立場をわかるように努めようとしています。まだなにも理解できていないんですけど、今までは全部スルーしていたと思います。うちは娘もいないし、多国籍な付き合いもないですし、差別の問題を聞いても右から左へ聞き流してでした。Colaboに身を置いてみて、現状を変えるために闘っている人、被害にあっている人がいて、今立ち止まって聞こう、考えようと思うようになったのが変わったところですね。

—活動を通して感じている社会的な課題と、それに対してどう取り組んでいきたいですか？

私も半年前まではこういう子たちがすごく身近に起こること、そこに対して活動している人たちがいること、何も知りませんでした。周りの人とそういう話をしたことも全くないし、触れたこともなく、身近にいないと思っていました。知らない人の方がまだまだ多いんじゃないかなって。私自身が知らなければならぬ現実や社会の仕組みがあるので、現状を伝えられるようになるためにも、まずは私が知ることだと思っています。



みふ.あさん

事務局のメンバーとして、特に相談支援に関わるスタッフの補佐や、バスカフェで提供する物品の用意などを行っています。

—Colaboで活動するきっかけは？

TBSのサンデーモーニングにゆめのさんが出演しているのを見て、同世代で社会の問題を発信している人がいるんだと衝撃を受けました。調べてColaboの活動を知り、私も育った家庭が複雑で家に帰れず困った経験もあったのですごく共感したのと、痛みを分かち合える

存在や地域のなかでの支えあい、コミュニティの大切さも自分の経験から感じていたので、自分もその一員になりたいと思いました。

前職では5年間会社員をしていました。子どもを産んで復帰して、ワーママとして仕事と家庭の両立を頑張っていたんですけど、けっこうメンタルもギリギリで、そのタイミングで第二子を妊娠したので、会社を辞めることにしました。働いている女性の方って、大変な思いをされて、それでもしがみついて頑張っている人がすごく多いと思うんですね。「なんでこんなに頑張っているのにうまくいかないんだろう」という怒りが自分のなかにもあって。

第二子が生まれてしばらく専業主婦をやっていくのかなと思っていたときに、その日の夜に、番組を見たその熱そのままに応募しました。今も私がここにいること自体が不思議な感じで、自分でもびっくりしています。ゆめのさんに初めてお会いしたときは「本物だ」みたいな。SNSなどで知ってつながる女の子たちも同じように思うのかもしれないけど、実際にお会いするとすごくフランクで、テレビとは違うギャップや安心感がありました。

—どんな想いで活動していますか？

私は社会活動にこれまで取り組んでこなかったので、最前線で活動する方々に活動に集中してもらえるように、事務のお手伝いができたらと思っています。

出会う女の子たちは家族とうまくいってない子たちもいると思うので、なるべく安心できる存在になれたらなと。そうでなくても、まずは害を与えないように接していけたらと思っています。Colaboでは、本人に「どうしたいか」ってずっと聞いていますよね。本人が状況を変えたい気持ちにならないタイミングもあっていいし、動きたい気持ちになったときには一緒に動く。それは重要なところだと思います。そこがずれちゃうと、中身が全然違ってくるんじゃないかなって。ゆめのさんは熱い人だなと思いますが、女の子たちに寄り添うけれど、そんなに甘やかさないというか、一人ひとりが自分で生活していけるように味方になってくれる雰囲気が出ていて感じがしますね。Colaboの活動を通して、自分の関心や人生観をもっと豊かにしていけたらとも思っています。

—Colaboの雰囲気を一言で表すと？

女の子たちにもスタッフにもいろんな方がいて、カラフル。そして、アットホームというか、こじんまりとした雰囲気があると思います。自分も在日韓国人で、そういうコミュニティのなかで育ってきているので、似た雰囲気があって。こじんまり感があるなかで見守っていて、暖かい。いつ会っても、ブランクがあってもすぐに仲良くなれるみたいな。私がいても全然違和感がないと感じられる、そんな雰囲気ですね。

—他の職場や活動と違うところはありますか？

大切にしていることが一環していると感じます。例えば、前の職場では営利企業であるために社会のためであっても利益優先で行動しなければいけないときもありました。Colaboは社会のため、女の子たちのことを想ってやっている社会活動なので、一貫して行動できるところが自分にもじっくりくらし、気持ち的にも楽です。メンバーのみなさんも、そこを本音で、本当に大切にしたいと思っていると感じますし、想いでつながっていると思います。

—活動を通して自分自身の変化はありますか？

Colaboに来て、ゆめのさんを通じて社会活動に関心を持ったり、女の子たちと接するなかで考えることも多くなり、視野が広がってきていると思います。最近は娘が寝てから、届いている女の子たちの相談や悩みを見る時間になっていて、それが自分の日課として、一日のルーティンも組まれるようになっていきます。ただそれは、「仕事の内容として」見るんじゃないくて、ほんとうに「どうしてるかな？」って気になって見ているっていう感じ。

—活動を通して感じている社会的な課題と、それに対してどう取り組んでいきたいですか？

自分自身もこれまでは、家庭のことに追われて、社会問題に関心を持ったり、目を向けられない状況があって、社会をこうしたいとか考えてきませんでしたが、Colaboに入ってからそういうところに気が向くようになり、社会問題に関心のある大人でありたいと思うようになりました。日常のなかで、社会的な問題に関心が向く世の中になるといいと思うので、自分の子どもも、そういうところに関心が向くように育てたいと思っています。



高ちゃん

事務局として、サポーター会員や寄付者の方々へのお礼、取材や講演などの調整、お問い合わせ対応、バスカフェでは警備を担当しています。

—Colaboで活動するきっかけは？

学生だった2015年に所属していた団体に、ゆめのさんが講演会に来ました。そのときはColaboのことも知らず、講演の内容にすごくハッとしました。そもそもそこまで自分が関心を持っていなかったというのもあって「女の子がお金目当てにやってるんじゃないか、そんなことありえない」と言われて、確かにそうだと思ったり。その後もColaboの活動は頭の片隅にはあったけれども、2020年に自分が働いていた団体が運営するホテルでColaboの女の子の宿泊支援をすることになりました。

Colaboのことを知ってはいたし、女の子の様々な状況に関心があるつもりだったけど、目の前にいる女の子たちとの出会いを通して、コロナ禍で、女の子の状況が深刻になっていることや、知っていたつもりで全然知らなかった10代の女の子たちの事情などを改めて考えることになりました。夜の街で性搾取されていたり、虐待を受けてあざがあったり、そういう子に接する機会がこれまではなく、大変な活動をされているんだと感銘を受けました。

はじめホテルのスタッフとして言われていたのは、色々な経験をしている子たちだからコロナが危ないだろうからしっかり消毒しなきゃいけないとか、深夜に徘徊する恐れがあるんじゃないかとか、そういう想定

もしていたんです。でも、実際に数十名泊まって、本当にこんなに小さい、若い、中学生のように見える子が大きいスーツケースをひいてくることもあったから、自分たちは事情を知らないけど、どうしてこんな子が荷物をまとめて出てきたんだろうって思ったり。女の子たちの使った部屋が血で汚れていることもあったり、ホストの名刺が落ちていたり、これが女の子たちが直面している現実の一部なんだと思いました。一見、自分がフロントスタッフとして鍵を渡したり、こんにちとは挨拶する限りは、問題を抱えていることはわからないなとも感じていました。

1年間かけてColaboの活動を知っていくなかで、スタッフの募集が出ていて。当然「女性限定」って書いてあったし、活動の趣旨からそれは理解できたんですけど、ホテルで待っているのではなく、さらに関わることができないかなと考えていたので応募しました。

—仁藤：男なのに応募してきたの？と、最初はびっくりしました。ホテルに同行したときに高ちゃんとお会いしたわかちゃんに「高さんって、どんな人？」と聞いたら、「え、会ってみる気あるの？男だから、まずありえないと思ってた」と言われて。でも、クソ男たちには敏感な私たちだけ、誰からも高ちゃんのことを悪く聞いてなかったから、「わかちゃん的にはキモくないんだよな？」と聞いて(笑) 面接で「女性限定なのになぜ応募したの？」と聞いたら、「自分も関わりたいと思ったからです！」と言ってきて「えっ(汗)」と思ったけど、「男にできることなんてほとんどないんだよ」と話して、それでもやれることがあるならやりたい、なんでもやります！みたいな感じだったから、そういう姿勢や気持ちでいられるかどうかは、男性としてColaboに関わるための最低限のスタンスだと思って採用しました。女の子たちも「男?!」ってびっくりしてた。

僕が知ってるColaboのスタッフは、わかちゃんしかいなかったし、募集要項も理解した上で男性の自分が飛び込んでいくって感じだったので、支えるというのは表現がおかしいかもしれないけど、どんなことでもやるという気持ちがありました。裏方で、見えないところでの仕事が多くなるだろうとは自分でも考えていたので、面接で稲葉さんから「僕は空気です」と聞いて、そういうことが求められるんだと思いました。

—どんな想いで活動していますか？

僕自身は在日コリアンとして、日本社会ではマイノリティとして生まれ育ってきました。いつでもマイノリティや、社会で弱くされてきている人たちは人権が尊重されていなかったり、排除されたりするなかで、それを変えていくために自分たちで声を上げなきゃいけない社会だと思うんですね。Colaboに来てさらに思ったのは、そもそも、マイノリティ自身が声をあげなければならない、社会から弱くされている人たちが、さらに身を削って声をあげていかなければならないことがおかしいんだと。そこに問題があると思ったら、誰もが声をあげ、社会を変えていかなきゃいけないと思います。10代の女の子や女性の運動に関して、僕は男性であるということで、言葉を選ぶと「当事者」ではないけれど、女性の問題、あるいは10代の女の子の特有の問題を、本人たちだけが声を上げるっていうのはおかしいって。

—仁藤：私たちが取り組んでいるのは、女性の問題じゃなくて男性の問題。だからそういう意味で、男性こそが当事者なんだよね。女に背負わせているのは男社会。

まさにその通りで、マイノリティの問題であっても、積極的に加害をしってくる人もいますが、多くの無関心の人、そういうことが起きていることすら知らない人達、その全員が当事者であると思っています。

—活動する上で心がけてることはありますか？

一つは「空気」ですね。清潔な空気。いるだけで存在感が出てきてしまうし、座ってもパソコンに向かっているだけでも「なんか男がいる」って思われているとは毎日思っています。いかに自然な状況をつくれるか常に心がけているというか、常に課題というか。

もう一つは、いくらColaboで働いているといっても、まだまだ自分のなかに固定観念があって、男性として生きるなかで身に着けてきてしまった、自分でも自覚できていない部分もあって、それが出てしまうとすごい嫌だなと思います。今は、自分のなかで、周りに何か変な影響を与える前に気づくこと、「今はちょっとよくなかったな」と感じられる、気づけるようになるように心がけています。

—Colaboの雰囲気を一言で表すと？

「ホーム」です。居場所に近いようで、ホームってちょっと違うかなと思っていて。以前、ホームレス支援をしている方に「ホーム」と「ハウス」は違うという話を聞きました。ホームには、その空間や繋がりが含まれていて、ハウスは物理的な家、住む所だと。ホームっていう言葉だと思うし、それこそ家を飛び出して来ている子たちにとって、「ホーム」となる繋がりがある場所なのかなと思います。

—他の職場や活動と違うところはありますか？

僕がすごく感じているのは、一つひとつの社会への影響力が違うこと。他にも影響力のある企業や団体はあるけれども、Colaboでは一つひとつの事務作業や、一つの女の子に対する声かけであっても、それがすごく社会的な影響力を持っていることを感じています。

スタッフ同士の関係性も、すごく風通しが良いと思います。僕は企業や会社といわれるところで働いたことがないので、そういう所とは比較できないし、キャリア的にも長くないのですが、忙しさや人数的なことは、どの団体も似たような状況にあると思うし、そのなかでスタッフの関係は、とても良い場だと思っています。日々、いろんな新しいことが起きるなかで、少ない人数で対応しなきゃいけなかったり、任されることも大きいですが、一つずつ丁寧に取り組んでいきたいです。

—活動を通して自分自身の変化はありますか？

僕は荷物を運ぶときとかに「よいしょ」とか「ふー、疲れた」とか「暑い」とか言いがちで、女の子たちの視点から考えたときに、男性である僕のそういう言動は、聞く人によっては「やってあげてる感」を感じたり「感謝しなきゃいけないのかな」とか「あ、この人重いもの運んでくれてる」と思うかもしれないと、最近指摘を受けました。他にも声量が大きくて女の子をびっくりさせたり、女の子たちの場の雰囲気を壊してしまったとか、ドアを開けるときの物音にもビクッとすることもあるし。次の日から直せるかというと、そうもいかないこともあります。自分の生活に染み付いているいろんな動作、仕草、声、発言とか、一個ずつ気をつけていきたいと思っています。Colaboでなければ言われな

かったかもしれないことも多くありますが、女の子たちのために働くなかで、自分からもどんどんそういうところに気づいていきたいと思っています。

—活動を通して感じている社会的な課題と、それに対してどう取り組んでいきたいですか？

「女性の問題」と思われていることについて「それは男性の問題である」ということに気づけない社会だと思います。Colaboに来て、僕はそれがわかってよかった。わかって変わらない人もいるけど、自分が気づけなかったように、それを見えないように、隠すようにしている社会があり、当事者である加害者は、そん

なに意識がないなかで相手を傷つけている構図があることを日々感じています。「加害／被害」の関係とか「上／下」の関係であるとか、そういう関係は特に「男／女」のなかで、まだまだあるなと考えています。

まずは自分自身がそういう風にならないために、わかったつもりにならずに認識していく。まず自分が知る、勉強する。そして、どうしていかなきゃいけないのか考えることだと思っています。マイノリティとか社会的弱い立ち位置にある人たち、見えなくされている人たちに、支援というかサポートというか、裏からバックアップというか、そんなふうに取り組んでいきたいなと思っています。



稲葉さん

副代表理事として事務局全体をまとめ、活動の運営全般に関わっています。シェアハウスで暮らす女の子たちの就労支援や、市川さんのいない日に女の子のリクエストに応じてご飯をつくったり、家にネズミが出たら呼ばれたり、事件が起きると駆け付けたり、なんでも屋のような存在です。

—Colaboで活動するきっかけは？

東日本大震災後、宮城県で被災地支援の活動をしていた時にゆめのさんと出会い、Colaboの立ち上げ時から一緒に活動することになりました。もともと高校生のキャリア支援のNPOに携わり高校で出張授業をしていたのですが、そもそも授業に来ていなかったり、学校を辞めたり、通っていない子たちの存在が気になっていました。いろいろな困難を抱えた高校生世代の子たちは学校の外にたくさんいるのだろうと限界を感じながらも、行動を起こしていませんでした。ゆめのさんから、避難所で出会った高校生たちとColaboの活動をはじめると聞いて、それまで見て見ぬふりし

てきた状況を変えられるかもしれないと思い、自分も一緒にやりたいと思いました。

—どんな想いで活動していますか？

はじめは被災地で一緒に活動する高校生たちの支えに少しでもなれたらと思っていましたが、ゆめのさんとの出会いや活動を通して、虐待や経済的困窮など様々な困難のなかにいる女の子たちが性搾取の被害に遭っていることを知りました。それまで高校生世代と接してきたにも関わらず、現実に向き合ってこなかった自分も含めて、そんな社会を創り出している大人たちに憤りを感じました。出会い、気づいたからにはこの状

況をなんとかしたい。そう思って活動を続けています。

—活動する上で、心がけていることはありますか？

自分自身の存在それ自体に加害者性があることを常に意識しています。男女不平等な日本社会において、「大人の男性」であることはそれだけで強い権力を持ってしまう。また、暴力や性搾取の被害に遭ってきた女の子たちにとって、「大人の男性」はだいたいの場合加害者です。悪気がなかったとしても、自分の言動や立ち振る舞いが女の子たちを大きく傷つけたり、安心して過ごせる場を壊してしまうことがある。やっと出会えたColaboなのにそうになってしまっただけは意味がありません。事務局のメンバーや、特に男性である私は「空気」になることを常に意識しています。常にそうした意識をしていないと、「大人たちの活動」にすぐになってしまいます。例えば、自分たちの都合でスタッフが活動拠点に書類を置いたりポストイットを貼ったりすると、とたんに「大人の仕事場」「事務所」っぽい雰囲気になってしまいます。Colaboは女の子たちの場所であることも、常に意識するようスタッフ間で共有しています。

—Colaboの雰囲気を一言で表すと？

同志であり、ゆるい家族。

—他の職場や活動と違うところはあるですか？

女の子たちがおかれた現状や直面した理不尽、社会の問題について、見て見ぬふりをしない、気づいたからには変えるまで諦めないところだと思います。

—活動を通して、自分自身の変化はありますか？

男性の加害者性を日々痛感しています。2016年にはじめて児童買春の実態を伝える「私たちは『買われた』展」を開催した際、会場で警備を担当していると、男性が展示物の正面に腕組みをして立ちふさがる姿が多くありました。女性たちはその男性と距離を取りながら遠目から展示を観たり、そこを避けるように他の展示物へ移動していました。男性たちは真剣に展示

を観ていたのだと思うのですが、周りが見えておらず、自分中心に動いている人が多いことを実感しました。

この企画展には、女の子たちと同じような経験をした方、性暴力被害者の方も多く来場されましたが、男性がいることで不安な気持ちになる人がいるかもしれないことを想像して振る舞っていた男性はほとんどいなかったのではないかと思います。会場は、静かに展示に向き合う雰囲気だったのですが、聞きたいことがあると突然大きな声を出したり、自分の意見を押し付けるように受付を担当していた女性にしつこく話をしてきたのも、男性たちでした。自分自身の振る舞いが脅威になっていることに自覚的でない人が、こんなにも多いのかと痛感するとともに、普段の自分もそうになっているのではないかとゾッとしました。

Colaboが向き合っている現状は、「大人の男性」たちが生み出してきたものばかりです。自分のなかにも内面化されている「有害な男らしさ」に、Colaboの活動を通して気づくことは今でもあります。

講演会などで、よく「男性である私には何ができますか」という質問をされる方がいますが、女の子たちに対して、男性に直接的にできることなんて、ありません。大切なのは「邪魔をしないこと」。それが唯一できることではないでしょうか。だからと言って何もしないのではなく、男性たちが自身の加害者性を自覚し、自らが変わろうとし、男性優位の社会構造を変えるために行動する必要があると思っています。

—活動を通して感じている社会的な課題と、それに対してどう取り組んでいきたいですか？

少女たちがどのようにして性搾取などに巻き込まれていくのか、加害者の実態や現状を伝える街歩きスタディーツアーなどの研修も担当していますが、「実情がよくわかった」「理解できました」とスッキリした顔で言われることがあり、残念な気持ちになります。背景には大人たちが作ってきた社会があり、自身がそれを容認してきた一人であることを多くの人に自覚してもらえるように、大人の責任を突き付けるようにしています。悩み、苦しみ、考え続けなければならないのは女の子たちではなく、大人たちが変わらなければならないと思っています。